

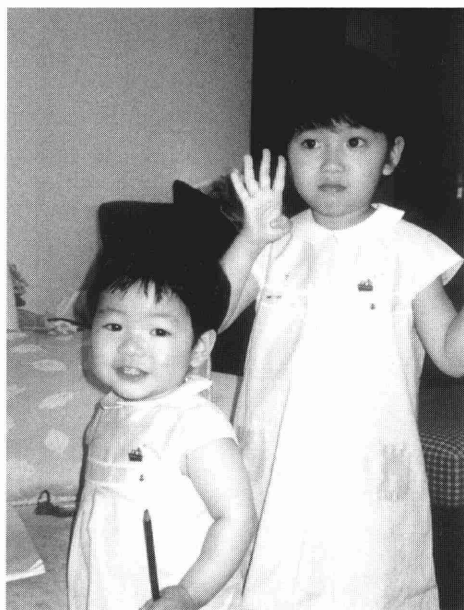
提 言

心を育てる環境整備

木村 慶子 (医療法人こころとからだの元気プラザ)
女性のための生涯医療センター所長

日本の乳児死亡率が世界で一番低いことから医療水準の最も高い国とされている。

このことは、「日本ほど赤ん坊のために尽くす国はない」と明治維新に日本に滞在した欧米人達が感じた日本の卓越した保健行政の賜物である。命を守られた日本の子どもたちが朗らかに、豊かな気持ちで、清らかに、誇り高い心が持ててこそ始めて本当に医療水準の高い国と言えるのではないか。いたるところに満ちていた子どもたちの嬉しい笑い声を復活させたい。子どもの心を育てるということは、良い環境の中で子どもの脳を育てることである。脳の栄養には、親の愛情に優るものはない。この面の環境を整える重要性を今こそ卓越した行政に真剣に考えていただきたい。心の発達の原点は母子間のアタッチメントの形成が十分にキチンとなされていることが何よりも重要な要素である。この時期の子育ての重要性を認識した行政の支援が望まれる。子どもの心を育てることは物作りのような合理的方法は通用しない。親と子の時間の共有の中で、倫理観、人間としての在りよう（高い人間性）が学ばれていく。それには子育て中の母親が幸せであることが大前提である。子育て中の母親の健康状態、精神状態、夫との関係に目を向けて子どもへの関わり方を今後もっとサポートしていく必要を感じる。母親と子どもの関係は乳児期のみで終わるものではなく、すべてのライフサイクルに深い関わりを持つ。性差医療という新しい領域で総合医療カウンセリングを担当してみて、成人女性の問題の多くに小児期の母子間の問題が関わっていることを痛感している。相談者の深層心理には幼児期、学童期において母親からの愛情が充分受けられなかった寂しさがずっと尾を引いている例が見られる。人間として育てられるためには、親の存在がいかに大きいものであるか、親の愛情が子どもにとっていかにかけがえのないものであるか子育ての環境を整える再考を提言したい。



いくつ?

写真提供 木村慶子